Osaka University Knowledge Archive

Title	半田知雄著『移民の生活の歴史』の成立を巡る一考察
Author(s)	Soares Motta, Felipe Augusto
Citation	日本学報. 2013, 32, p. 87-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25564
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

半田知雄著
『移民の生活の歴史』の成立を巡る一考察

Soares Motta Felipe Augusto（ソアレス モッタ フェリッペ アウグスト）

はしがき―半田知雄論をめざして―
1　半田知雄と『移民の生活の歴史』
　1－1　半田知雄の略歴―ブラジルに渡った一人の移民―
　1－2　日系社会の知識層と半田知雄―「コロニアの良心」という呼称を巡って―
　1－3　半田知雄の自己意識―「私はピントールだ」―
　1－4　半田知雄の著作と『移民の生活の歴史』の位置づけ
2　『移民の生活の歴史』の執筆状況
　2－1　内側から日系社会を論じる―人文研とその環境―
　2－2　ブラジル研究ゼミナールと『移民の生活の歴史』
3　半田が書いた移民総合史の特徴―生活の歴史としての語り―
結びにかえて

はしがき―半田知雄論をめざして―

ブラジル日本移民研究史の大きな流れの中で半田知雄（はんだともお）著の『移民の生活の歴史』はかなり重要な位置を占める。自分自身の移民としての経験に基づいて書かれ、1970年に発表されたその大著はおよそ800頁を有し、ブラジルの日本人の歴史を多角的に綴り、ブラジル日本移民史の古典となっていると言っても過言ではない。若き年齢にてブラジルに渡り、およそ80年間その国で生活し、画家また評論家、移民史研究家として日系社会を対象にした半田知雄の著作中、おそらく『移民の生活の歴史』がもっとも完成度が高く、もっとも読まれている書物であろう。その作品と向き合う第一歩として、本稿では『移民の生活の歴史』（以下『移生史』と省略する）の成立とその執筆過程を巡る史的考察を試みる。

「ブラジル日系人の歩んだ道」という副題を持つ『移生史』の語りは、初回移民船「笠戸丸」のサントス入港に始まり、戦前と戦後の日系社会について幅広く論じたあと、70年代当時の日系社会の現状を展望してその幕を閉じる力作である。その中で半田は、日系社会史を主に移民の生活を基軸にして考察していく。半田は『移生史』をブラジル日本移民

の総合史として著し、自分自身の移民としての経験を生かした回顧録としても書いている。

ただし、ブラジル日本移民研究において半田知雄の知名度は高いものの、『移生史』をテーマにした先行研究は現時点までなされておらず、半田知雄を対象とする先行研究はいまだに少ないと言わざるを得ない。確かに、日系社会の知識層を取り上げる先行研究の中、または日系社会の芸術史を扱う研究では、半田知雄を巡る記述は辺境的でありながら確認できるが、半田知雄を中心的に取り上げる先行研究は筆者の管見の限り極めて少ない。特に日本においては、半田知雄の名前は主に『移生史』の著者、あるいは日本移民を描く画家として知られているにもかかわらず、半田を学術的に取り上げる研究はない。その唯一の例外は、中曽根武彦「地平線の群像―語り継ぐ破天荒人生(9)　半田知雄―日本移民の歴史を書き綴った画家」[1]であろうが、この文章は半田の簡潔な紹介に留まり、それ以上に半田を論じていない。

また、ブラジルでも半田知雄は表面的にしか論じられていないのが現状である。2011年に刊行されたサンパウロ大学教授である本山省三の『日の出の象徴の下で』[2]では、半田知雄の絵画作品が多く使われており、ブラジル日本移民研究にとっての半田知雄の重要性が主張されているが、半田についての考察は深くは行われていない。概観すれば、現在まで日本とブラジルで行われてきたブラジル日本移民を巡る研究では半田知雄の著作は表面的にしか取り上げられておらず、思想家として半田知雄は論じられたことはないと言ってもよかろう。その穴を埋めるため、筆者は半田知雄の著作を読み直すことを提案する。

筆者の提案は、近年になって生じてきた、ブラジル日本移民研究の新しい風潮の中に位置する。その新しい風潮とは細川周平や西成彦をはじめとした、移民が書いた文学および移民の感情の世界やその表現をテーマとする研究である。その中で筆者が特に興味を抱いているのは、移民がいかに自己の歴史を綴るか、あるいは移民がいかに自己を語るかという問題である。自分自身が移民であり、絵描きと物書きという二つの側面を並行しながら60年という長い時間を通して日系社会をテーマとした半田知雄の活動や思想は、まさしくその研究のための好材料だと思う。半田知雄の著作を読み直すことにより、一人の移民が自分の歴史に対して持っている解釈を汲み取ることができ、ブラジル日本移民史に新しい論点が見えてくると思う。筆者が最終的に目指している「半田知雄論」とは、半田知雄を通して、ブラジル日本移民史・日系社会史における自主性の問題を考え直すことである。

その一環として、本稿では半田知雄のいちばんよく知られている著作、『移生史』とその執筆過程に注目したい。そうすることによって、日系社会の内側からその知識層が自分たちの歴史を書くという営みがどのようなものであったかを探ることができると思うからである。本稿で取り上げようと思っている問題点がこの数ページで解決されるとは決して思わないが、半田知雄論の出発点となり、半田の活動を考えるきっかけとなれば幸いである。

『移生史』を取り上げるその方法論として、まず半田知雄という人物やその著作を移民史研究の中に位置づけるといういわば基礎的な作業が必要である。その位置づけは二つの軸を据えて実施する。一つ目はブラジル日系社会や日本移民史研究における半田知雄に対する認識である。『移生史』を読み解くには、主にその側面が重要であると思われる。もう一つは半田自身の自己意識の問題である。後述するが、半田知雄の自己意識の問題は本人の画家としての側面と密接な関係がある。その位置づけが必要だと思われる主要な理由は、前述したとおり、『移生史』はブラジル日本移民の総合史のみでなく、移民としての半田知雄の経験が色濃い作品だからである。また、『移生史』はサンパウロ人文科学研究所（以下「人文研」と省略する）という空間を拠点にして書かれ、周りの研究と呼応する形で思案されたと思うからである。換言するならば、なぜ半田知雄が『移生史』を書いたのか、またはなぜその執筆を委託されたかを重要な問題点と考えている。

それを踏まえて、『移生史』の構成や趣旨を見つめたい。本稿では『移生史』の内容やその著作で取り上げられる諸問題について詳述はしないが、筆者の見解でその著作の最大の特徴について触れておきたい。その特徴というのは、半田が試みた生活の変化を主軸に据えた歴史の語りにあると思う。

なお、本稿の執筆に際して使用した主な資料は、1970年刊行の『移生史』の初版である。その他、半田知雄の著作や半田が長い間執筆活動の拠点にしたサンパウロ人文科学研究所が出版した機関誌『研究レポート』も使用した。その他の資料に関しては、文末の注や文献一覧を参照されたい。

1　半田知雄と『移民の生活の歴史』[3)]

1－1　半田知雄の略歴―ブラジルに渡った一人の移民―

1908年にブラジル日本移民が正式に始まる。初回移民船「笠戸丸」がサントス港に停泊する２年前の1906年３月22日、青森県八戸にて半田知雄が生まれる[4)]。その幼年時代については不明な点が多いが、1917年、小学校５年を終えた11歳の時、家族と共に渡伯したのがその移民としての第一歩である。半田一家が移民船「若狭丸」で日本を出てブラジルに渡った当時の家族構成は、宇都宮中学の体育教師をしていた父親の己子次（36歳）、継母のサク（26歳）、それから家族構成の規定を満たすために一家と共に移住した継母の実妹、シナ子（16歳）であった。

若狭丸は４月20日に神戸港を出港し、６月15日にサントス港に入港する。サントス市から移民運送列車で山脈を越え、サンパウロ市にあった移民収容所で一週間過ごした後、一家はソロカバナ線の三等列車で、サン・マヌエル市ポルト・マルチンス駅に向かう。そこで、チエテ河畔に面したサント・アントニオ耕地に配耕される。その当時の移民の多くと

同じように、半田一家もコーヒー農園の契約労働移民としてブラジルに渡ったわけである。

一家は長い間サント・アントニオ耕地に留まったわけではない。戦前移民の多くと似たような経路を辿り、ブラジル人農園主のコーヒー農園をはじめ、サンパウロ州の耕地を転々と廻るが、1920年、父親が体調を崩したのをきっかけに、一家は農作業を切り上げ、日本で小学校教諭の経験を持っていた己子次がサンパウロ州プロミッソン市のイタコロミー植民地で日本語教師として迎えられる。その後、叔母シナ子が通訳者として活躍し日系社会のインテリの一人であった鈴木貞次郎と結婚する。鈴木は、戦後、評価の高い『ブラジル移民の草分け』（1967年）など、日本移民史を巡る著作を数冊執筆する。1921年、鈴木に連れられ、半田知雄は親の元を離れ、ポルトガル語および日本語を勉強するためサンパウロ市に移動し、鈴木の紹介で邦字新聞「伯剌西爾時報社」で植字工として働きながら、夜学校（Grupo Escolar、小学校・４年制）に通ってポルトガル語を修得する。田舎から日系社会の中枢部であったサンパウロ市に出た半田はその時、聖州義塾の創立者である小林美登利と出会う。小林美登利との出会いは後ほどの半田知雄の思想に決定的な影響を及ぼす。

なお、サンパウロ市に出た半田にとって、特に重要なのは、幼年時代から興味を持っていた絵の勉強を始めたことであろう。半田知雄の絵の勉強は既に1927年にチラデンテス大通りにあったEscola de Artes Plásticas（造形美術学校）に入学することに始まるが、主に1931年から1935年の卒業まで自由研究生として通ったサンパウロ美術学校（Escola de Belas Artes）での勉学が注目に値しよう。その当時から、半田は日系人画家のみならずブラジル人や他国籍移民画家との交流も盛んだったと言われる。

サンパウロ市在住がきっかけで、半田が戦前から日系社会の知識層と交流を持ち、日系社会の中核をなす諸組織に出入りするようになる。伯剌西爾時報社の植字工としての仕事もそうだが、半田が若い時分から活字や報道と接していることが注目に値しよう。また、小林美登利や鈴木貞次郎をはじめ、半田はその時期からアンドウ・ゼンパチ（1924年に出会い）や河合武夫（1925年に出会い）など、日系社会の知識層の基礎を形成する人々と交流するようになる。事実、半田知雄は戦前から戦後にわたって多数の日系社会の組織に参加し、執筆活動と画家としての本業を並行した。1935年に創設されるブラジル日系社会の最初の美術団体「サンパウロ美術研究会」（聖美会）の創設にも加わり、長年その幹部を務めていた。戦後日系社会の知識人グループ「土曜会」とその後身である人文研のメンバーでもあった。

半田知雄の活動は戦前から戦後まで続き、1996年に90歳の彼がサンパウロ州アチバイヤ市の自宅にて亡くなることで終わる。生涯を通して絵を描き、文章を書き、ブラジル日系社会の知識層の中で非常に大きな存在であった。

１－２　日系社会の知識層と半田知雄―「コロニアの良心」という呼称を巡って―

半田知雄と交流を持ち、彼について2012年現在調査中であるブラジル在住の画家、田中慎次[5)]は、2008年１月17日、インターネット上で公開されている『人文研エッセイ』において、半田知雄のことを書いている[6)]。半田を偲ぶ田中慎次のそのエッセイのタイトルになっているのは、日系社会のインテリであり、半田と親友であった、河合武夫がいつか使ったとされている「コロニアの良心」という言葉である。

先行研究によって明らかにされている通り、コロニアというのは戦前の「在伯邦人社会」に対して戦後から使われるようになるブラジル日系社会の総称または自称である。その語源とはもともとポルトガル語のColônia Japonesa（日本人集住地）に由来し、Colônia Alemã（ドイツ人集住地）、Colônia Italiana（イタリア人集住地）などと区別され、戦後は短くしてコロニアのみになり、「日本の日本人」とはまた一線を画する団結したブラジル日系社会を意味する。コロニア語、コロニア文学などという熟語が表すように、ブラジル日本移民のアイデンティティと深いかかわりのある呼称で、「我々ブラジルの日本人」という考え方が深層まで浸透しているといえよう[7)]。

河合武夫、それから田中慎次が半田のことを「コロニアの良心」と呼んでいるのは、いかにも興味深いことであり、日系社会の知識人グループにとって、半田がどういう存在であったかを理解するうえで大きな手がかりになっていると思う。

半田は日系社会全体を表すコロニアの「良心」と呼ばれているが、ここでの「良心」はどのような意味を秘めているのだろうか。そのことを念頭に置きながら辞書を引いてみると、「良心」とは「何が善であり悪であるかを知らせ、善を命じ、悪をしりぞける個人の道徳意識」であると定義されており（『広辞苑』）、その語源はラテン語のconscientia（com＝「と共に」＋scire＝「知る」）に由来することがわかる。語源に戻って、もう一度「良心」の使用を吟味すれば、次のような解釈が可能だと思う。すなわち、conscientiaというのは、善を選び、悪を退ける個人の道徳意識であれば、その大前提として、善と悪を「見極める」「区別する」という能力を要し、ある状況または流れの観察能力と観察されている状況の把握力こそが良心（＝conscientia）の機能性を有効にすると言ってもよかろう。最終的にその「見極め」や「区別」が偏ったものになったにせよ、ある程度その状況自体を観察し反芻する過程が必然的に予測される。なお、その有効性が必ずしも中立的な立場を要しないことは、良心の形成が社会的な道徳観や個人的な価値観と密接な関係を持っていることを考えればわかるが、良心は咀嚼力、反省力、把握力を絶対的に必要とするとはいえる。なお、河合武夫に引き続き、田中慎次が半田知雄を「コロニアの良心」と呼んだのは、おそらく日系社会の知識人グループが半田にその区別をする能力を認めていたということを指しているからだと思う。

田中慎次のエッセイが表す通り、日系社会の知識層内では、半田が主にその洞察力によって評価されていたと思う。というのは、それは決して執筆家としての半田知雄のみに付与された評価ではないが、移民と日系社会を絵または文章をもって生涯の対象にした半田に対する一般的な評価であると言ってもよかろう。その解釈に従えば、『移生史』の初版の「発刊のことば」の、当時の人文研理事長であった中尾熊喜の「移民の生活とその内面を観察し、記録し、そして日本人に共通のことばで表現する仕事は、著者半田知雄を措いて他に適格者はあるまいとすら思われるのである」[8]ということばが特別な意味を帯びる。

戦前、移民として渡った半田は早い時期から多数の知識人グループに参加し、画家および評論家として大いに活躍した。その活躍の頂点といわれるのは移民を描いた絵画作品、または本稿で取り上げる『移生史』であるが、戦前からの執筆作業において、半田知雄がブラジル日系社会を取り上げるときのその姿勢は、「学者」または「ほかの移民」とはまた異なる側面があったことが、その当時の仲間には意識されていた。その異なる側面が「コロニアの良心」という評価につながる。

１－３　半田知雄の自己意識―「私はピントールだ」―

サンパウロ大学日本語学科初代学科長を務めた鈴木悌一が残した記述によると、半田知雄はある機会に「私はピントールだ」[9]と強く主張したことがあったそうだ。日系社会全体あるいは知識層では、コロニアの良心または日系社会をテーマとする評論家として半田知雄は知られていたが、本人の自己意識では自分は画家であると強く認識していた。半田の著作を読み、半田の文章を論じる際、その自己意識も重要な点であると思う。

むろんのこと、画家としても半田知雄は知られている。1986年、日本で刊行された画文集『ブラジル移民の生活―半田知雄の画文集』（以下『画文集』と省略する）には半田知雄がいちばんよく知られている移民を描いた絵画作品が収録されている。初期移民の農業に携わる姿、開拓作業の苦労、移民と過酷な環境との闘いなどを描く絵画作品は、戦時中に敵性国民と見なされた日本人が公の場での写生を禁じられた時期に、半田が自分の移民としての幼年時代の経験を活かして、工房に閉じこもって作成したと言われる。それらの作品は後にブラジル日本移民協会に寄贈され、いまでも展示されている。

半田知雄の画家としての史的考察が必要であると思うものの、本稿では半田知雄の画家としての側面の詳しい考察はしない。ただし、本人が画家であったこと、それから本人の自己意識のなかでも評論家や移民史研究家よりも、自分が画家であることにこだわっていたという姿勢は、いかにも無視しがたい問題である。本稿のテーマである『移生史』を解読する際にも、その点が大きなキーポイントになると思う。

筆者にとって『移生史』の最大の特徴は、ブラジル日本移民史を生活ぶりの変貌を主軸

に据えて語ることにある。それは単なる移民の生活環境を描写し記録することだけに留まることを意味せず、その生活パターンの変化を中心に移民の感情の世界を書き留める作業である。その歴史の捉え方についてはまた後ほど詳述するが、その著述の仕方の選択の特徴は半田知雄の画家としての活動と関係があると思うものの、決してそれが唯一の理由であるとは思わない。ただし、半田知雄の本業が画家であったこと、それから彼が特に移民をテーマにした作品で知られているのは事実である。また、半田知雄の絵画作品における移民の表象、それから『移生史』など半田の文章における移民の表象にも差異があると思われる。その比較も必要な作業だと思われるが、本稿では半田知雄の文章、主に『移生史』に注目し、画家半田知雄の移民表象の問題は今後の課題にしたい。

１－４　半田知雄の著作と『移民の生活の歴史』の位置づけ

半田知雄の著作として初めて刊行される作品は、『今なお旅路にあり―ある移民の随想』（以下『今なお』と省略する）である。1966年に刊行されたその著作には、戦前から発表された半田知雄の主要な論文が収録されている。人文研が正式に創設される1965年の最初の刊行物として発行され、半田知雄渡伯50周年の記念刊行物でもある。それらの論文には、書かれた当時の時代背景や政治情勢が強く反映されており、幅広いテーマにわたって繰り広げられている。『今なお』で取り上げられる幾つかのテーマは、戦前と戦後の日系社会にとって大きな問題である第一世と第二世の関係や確執、子孫教育の実行、芸術の意義、ブラジルにおける日本移民の発展やブラジル文化への貢献などである。それらの問題はもちろん『移生史』においても現れるが、長いスパンにわたって書かれている論文選集であり、その書かれた当時の緊張感が漲っている『今なお』とは異なり、『移生史』では反省的かつ回顧的な立場が感じられると言えよう。

【表１】半田知雄の著作（本として刊行されたもののみ。数版ある場合は初版のみ記載）

1	1966『今なお旅路にあり―或る移民の随想』太陽堂書店、サンパウロ市
2	1970『移民の生活の歴史―ブラジル日系人の歩んだ道―』家の光協会、東京
3	1976『ブラジル日本移民史年表』サンパウロ人文科学研究所、サンパウロ市
4	1985『愛はいつまでも』サンパウロ人文科学研究所、サンパウロ市
5	1986『ブラジル移民の生活―半田知雄画文集』無明舎出版、秋田市
6	HANDA, Tomoo, *Memórias de Um Imigrante Japonês no Brasil*（野尻アントニオ訳）, São Paulo, T.A. Queiroz, 1980（『移生史』第一部「契約移民―金のなる木をさがして」のみのポルトガル語訳）
7	HANDA, Tomoo, *O Imigrante Japonês - História de Sua Vida no Brasil*, São Paulo, T.A. Queiroz, 1987（訳者二世数名、『移生史』全文のポルトガル語訳）

1976年の『ブラジル日本移民年表』は、ブラジル日本移民史を巡る主要な出来事を網羅した年表である。初刊以来、数回にわたって版を重ね、いまでも重要な資料である。1986年に日本で刊行された『画文集』では、ブラジル日本移民史料館に寄贈された移民を巡る作品45点が収録され、それに対して半田知雄の解説が付されている。なお、1985年の『愛はいつまでも』は、半田が亡くなった愛妻のさつ江が生涯を通して緻密につけた日記の抜粋、または文学作品を自分なりに編纂し解説をつけて発表されたものであり、自伝的な色が濃い著作である。

半田知雄の著作の中では、『移生史』が最も重要な位置を占めている。1970年にその初刊を迎え、第二版と第三版を重ね、1980年にその第一部が野尻アントニオによってポルトガル語に翻訳された。また、1987年に全文が第二世訳者グループによってポルトガル語に訳された。ポルトガル語訳された半田知雄の唯一の著作である。

なお、『今なお』と異なり、『移生史』は既出文章の選集でなく、ほぼ書き下ろしで書かれた著作である。比較的早い時期にブラジルに渡り、日系社会において70年以上生活した半田知雄は、戦前から戦後に至るまで、ブラジル日系社会がどのように変化していったかを観察し経験する立場にあり、『移生史』の執筆は彼にとって日系社会史全体を顧みる機会でもあり、自分史を顧みる機会でもあったと言えよう。

『移生史』は全文日本語で書かれ、1970年３月に刊行された。797頁、12部、79章、24節、多数の挿絵、スケッチ（半田作）、写真、コロニア用語解説、参考文献リストからなっている。その執筆過程を知ることが重要と思われるので、史料に基づいて、その経緯を追っていきたい。

『移生史』が書かれる史的経緯を辿っていくと、1967年発刊の人文研機関誌『研究レポート』第２号によると、「67年３月よりアンドウ氏に引き続き、半田知雄氏が専任研究員として「コロニアの生活文化史」の研究に着手」[10]と書いてあり、1969年10月発行の『研究レポート』第４号では、「幸い、半田知雄氏の力作「ブラジルにおける日本移民の生活の歴史」はすでに草案が完成し、近く日本において印刷刊行の運びとなる予定である」[11]と書いてあるので、その執筆期間を大まかに1967年３月から1969年９月の２年半と想定してよかろう。ゆえに、1967年に半田知雄が『移生史』を書き出した時には既に61歳であり、ブラジル移住歴50年の時であるということがわかる。

笠戸丸から70年代までを含む『移生史』は多岐多様なテーマにわたって展開されるが、はじめてのブラジル日本移民総合史ではない。半田知雄が『移生史』を書き出した1967年には、ブラジル日本移民と日系社会を巡る研究が長い間すでになされており、膨大な蓄積があった。ここではブラジル日本移民（史）研究の回顧をするつもりはないが、『移生史』が書かれる時期と状況を考慮する必要があると思われるので、その沿革をごく簡潔に書い

ておきたい。なお、筆者がその必要を感じるのは、後で展開する次の二つのことに起因する。一、『移生史』は人文研という研究空間において書かれ、周りの研究や議論を意識した上でそれと対話する形式で執筆されたこと。二、『移生史』が執筆される時期は、公的な面において、皇太子夫妻訪伯（1967年）、ブラジル日本移民60年祭（1968年）など、日系社会にとって出来事の多い時期である一方、入国日本移民数が減りつつあった時期でもあったということである。私的な面では半田自身の渡伯50周年があり、また経済的に安定した時期である[12]。ブラジル日本移民史かつ自分の個人史を総合的に顧みることに適した機会であったと思われる。

２　『移民の生活の歴史』の執筆状況

２－１　内側から日系社会を論じる―人文研とその環境―

ブラジル日本移民史は戦前から多角度から書かれている。初期では主に日本政府または移民会社の役人によって書かれる報告書、あるいは紀行文がその主流をなすが、ブラジルの研究者によってなされる研究も戦前から既に確認でき、主に欧米から輸入された黄禍論に煽られた日本民族の不適応性を基軸に繰り広げられた。また、日系社会内の在野の研究者によって形成される知識人グループが実行する自称「啓蒙的な活動」もあれば[13]、各集住地によって書かれる「〇〇植民地〇〇年史」という類の地方史も珍しくない[14]。

戦後は文化人類学や社会史学の視座からブラジル日系社会を取り上げる研究者もブラジル、アメリカ、日本の三ヵ国から登場する。1957年には、泉靖一調査団によってなされた現地調査の成果として『移民―ブラジル移民の実態調査』（古今書院）が刊行される。60年代は米国人研究者（コーネル大学 John B. Cornell教授、テキサス大学 Robert J. Smith教授など）がブラジルに渡り、調査団を組んで日系人集住地の研究にとりかかる。それらの調査活動には既に斎藤広志や前山隆など、将来の日系社会研究において重要な業績を残した研究者が登場している。

つまり、『移生史』が執筆されるまでには、日本移民史を巡る研究の相当の蓄積がある。例えば、『移生史』の執筆にあたって、半田知雄が使用した参考文献とその引用数・頻度の統計を確認すると、香山六郎著『移民四十年史』（サンパウロ、1949年）、サンパウロ新聞社編『コロニア戦後十五年史』（サンパウロ、1960年）、ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会編『ブラジルに於ける日本人発展史』（上・下、ラテンアメリカ協会、1941年）などが高い頻度で使われていることがわかる。半田知雄がそれらを参照しながら、『移生史』の執筆に着手したことは明白である。『移生史』は皆無から生まれた著作でなく、上記の背景をもって執筆されている。それから、その背景の中核を理解する上で、土曜会と人文研という空間が必要不可欠だと思う。

戦後の混乱の中で形成された知識人グループ土曜会が1965年正式にサンパウロ人文科学研究所（人文研）になる際[15]に、その趣旨を実行する一環として専任研究員が選ばれ、研究に着手する。人文研が発足後はじめて出す『研究レポート』第１号の「事業報告」[16]では、最初の専任研究員という肩書をもって選ばれるアンドウ・ゼンパチが「ブラジルにおける日本人移住史およびコロニア社会史の研究」を1963年に着手し、「1965年には、コロニア社会史を中心に、半田知雄・斎藤広志の両氏の協力を得て、着々と推進されている」[17]と報告されている。アンドウ・ゼンパチは邦字雑誌『文化』や『時代』でも中心的な人物であり、執筆活動を本業にしていた生粋の知識人であった。

そのアンドウ・ゼンパチ（本名は安藤潔、1900年生、1983年没）は広島県の生まれで、1924年東京外国語学校（現在の東京外語大）のポルトガル語科本科第１期生であり、昭和天皇ご成婚の記念事業「大毎移民団」の移民監督として渡伯する。伯剌西爾時報の記者や日伯新聞の編集長などを歴任し、戦前は邦字雑誌『文化』において中心的な立場を占める。戦後、アンドウがいち早く土曜会のメンバーになり、1965年人文研初代専任研究員に就任し、日本とブラジルを往き来し調査にとりかかっている。

アンドウは1983年に日本で没するが、人文研の専任研究員として『研究レポート』第１号と第２号に掲載する二つの論文では、ブラジル日本移民を世界史的な現象として分析しており、人文研発足当時の趣旨を大いに反映していると思われる。

人文研は研究所であり、日系社会内の組織であるゆえに、当然その運営費が必要である。人文研の維持費の出所をみると、会長を長い間務めた中尾熊喜[18]、または副会長を務めた蜂谷専一[19]を中心に、日系社会の経済有力者、あるいは日系企業からのサポートが多い。また、専任研究員には研究員手当が存在しており、『研究レポート』第１号によると、1965年では、2,400,000クルゼーロスである[20]（コロニア社会編纂専任研究員および他の２名の研究員の手当）。

1967年、アンドウ・ゼンパチに代わって、半田知雄が専任研究員として『移生史』の発行にいたる研究を始める。1967年の『研究レポート』第２号において、将来『移生史』になるものを書きだしたばかりの半田知雄が、その様子を語っている。その構成自体すらいまだに決められていない『移生史』の創生期において、半田知雄の何を書きたいかという姿勢や迷いが露わにされている文章でもある。

> ≪コロニア生活文化史≫とは仮称であって、ブラジルにおける日本移民の生活の歴史を記述することである。だから≪ブラジルおける日本移民の生活≫でもいいと思う。
>
> すでに、アンドウ・ゼンパチ氏の≪近代移民の社会的性格≫があり、本レポートには、≪日本移民の社会史的研究≫が発表されて、ブラジルにおける日本移民の歴史は、

世界史的立場から、先ず、出移民国の事情があきらかにされ、ついで、ブラジルの社会的経済的事情の中で、コロニアの発展がのべられる。

さらに、斎藤広志博士は、ブラジル農業における日本移民の影響についての研究を計画されているので、ここではブラジルの農業史との関連において、日本移民の農業活動が研究されるばかりでなく、一面ではコロニア農業文化史として、日系人の生活の各方面へ研究がひろめられていくことと思う[21]。

上記の文章から、人文研を中心に『移生史』が執筆される当時のブラジル日本移民研究の状況を少しうかがうことができる。むろんのこと、人文研を中心に『移生史』を執筆している半田知雄が主に人文研内で行われている研究を強く意識しているとは当然であるが、人文研という組織をあまりにも閉鎖的な空間として決めつけず、その横の繋がりを考える必要もあるのではないかと思われる。それを象徴する人物はまさしく上記の引用に登場する斎藤広志[22]である。

斎藤広志（1919年生まれ、1983年没）は宮崎県の生まれで、1934年に15歳で両親とともにブラジルに移住し、農業に従事する。しばらくしてエメボイ農学校に入学した斎藤は、２年間ポルトガル語と農業知識を学ぶ。1945年にパウリスタ新聞に入社し、半日をポルトガル語記事の翻訳に費やし、半日をサンパウロ社会政治学院に聴講生として通学した。1946年に日本人の文化変容に関する調査を開始したサンパウロ大Willems教授への情報提供者となり、1947年には　Willemsと共著で「Shindo-Renmei：Um Problema de Aculturação」（「臣道聯盟　同化の問題」、タイトルの邦訳は筆者による）を“*Sociologia*”誌に発表する。1951年、31歳でサンパウロ社会政治学院に入学し、1954年から1956年まで修士課程に通う。1952年から1953年にかけてUNESCOの社会緊張の研究のために、ブラジル日本人社会で調査を行った泉靖一東大助教授の調査助手を務めるが、そのとき泉に大変な影響を受け、後年泉との出会いによって「学者としての目標が決まった」と述べている（『異文化の中の50年』、1983年、289頁）。1955年、日本外務省委託調査『移民―日本人移民実態調査』のために再度ブラジルに訪れた泉靖一とそのグループに参加し、南マットグロッソ州の日本人移民地の調査およびパラナ―州ポーランド人植民地の調査に従事した。泉の推薦により1957年神戸大学に助教授として招聘される。1959年にブラジルに帰国し、サンパウロ社会政治学院教授となる。1960年、『移住者の移動と定着に関する研究』で神戸大学において経済学博士号を取得する。1969年にサンパウロ大学芸術コミュニケーション学部に移動する。1983年直腸がんのため64歳で逝去した。斎藤広志と人文研は大変関係が深く、彼が人文研の理事長を務めたことも重要な事実である。

アンドウ・ゼンパチや斎藤広志の影響が『移生史』に強く感じられるが、それは理論的

な枠組だけに依拠する影響でなく、やはり人文研という空間において、その同じ研究集団に所属するメンバーとして感じられる。それをよく表しているのは「ブラジル研究ゼミナール」である。

２－２　ブラジル研究ゼミナールと『移民の生活の歴史』

『研究レポート』第１号によると、ブラジル研究ゼミナールとは「ブラジルの社会・政治問題および日系コロニアの諸問題をとりあげ、それぞれ専門研究家の協力を得て、毎月一回（第４金曜日夜）」開催されるゼミナールであり、「これは、当研究所が直接コロニアの人々に働きかける活動であり、一般の討論参加を歓迎し、コロニアの間に本格的な学的気運を培うことを主目的としている。毎月約50名の熱心な参加者を得て、活発な討論が行われている」[23]と記してある。『移生史』の執筆される期間が含まれている1964年第１回開催から、1971年第65回までのそのゼミナールを調べたことを、【表２】で整理しておいた（下線部分は半田知雄に関する箇所である）。

人文研の発足直前の1964年から『移生史』が刊行されたあとの1971年まで、半田知雄はブラジル研究ゼミナールで合計９回発表した。半田の発表の題目を見れば、それが明らかに『移生史』の内容と重複しているところが多数ある。半田知雄は『移生史』を執筆しながら、それを発表していったと理解してもよかろう。人文研内にて行われたブラジル研

【表２】ブラジル研究ゼミナール第１回～第65回

第１回（1964年８月21日）～第13回（1965年11月26日）、合計13回（発表者：斎藤広志、間部学、前山隆、アンドウ・ゼンパチなど、人文研グループ中心。半田は第４回「ブラジルの生活感覚と日本趣味」で発表、合計１回）
第14回（1966年１月28日）～第24回（1966年11月25日）、合計11回（発表者：ジョン・コーネル　テキサス大学人類学教授、前山隆など。半田の発表なし、合計０回）
第25回（1968年１月27日）～第35回（1968年11月24日）、合計11回（発表者：アンドウ・ゼンパチ、前山隆、斎藤広志など。半田知雄は第26回「コロニア生活文化史」、第29回「マカコ・ベーリョ論」で発表、合計２回）
第36回（1969年１月26日）～第45回（1969年11月22日）、合計10回（発表者：Francisca Isabel Schrug Vieira、野尻アントニオ、斎藤広志、大林太良　東大助教授など。半田知雄は第39回「移民の生活にあらわれた美意識」、第44回「日系農家の生活」で発表、合計２回）
第46回（1970年１月31日）～第56回（1970年11月28日）、合計11回（発表者：河合武夫、醍醐麻沙夫など。半田知雄は第53回「コロニア・レジャー論」で発表、合計１回）。
第57回（1971年１月30日）～第65回（1971年９月24日）、合計９回（発表者：斎藤広志など。半田知雄は第60回「過渡期的社会としてのコロニア」、第63回「シリア移民と日本移民―それぞれの特殊性を比較する」、第65回「コロニアの老人の問題」で発表、合計３回）。

究ゼミナールの出席者は主に人文研関係者であったが、日本人やブラジル人の研究者の出席もみられる。また、人文研関係者ではない、いわゆる一般人の参加もあった。

結論としては、『移生史』が書かれる状況について次の点を指摘することができる。まず、在野の一人として、または移民の一人としての書き下ろしの著作でありながら、『移生史』はその当時まで多面的に蓄積されていたブラジル日本移民を巡る研究、あるいはその当時まさに実行されつつあった研究の方針を意識して執筆され、その執筆される過程において少なくとも数回にわたって断片的に発表され議論された。次に、アンドウ・ゼンパチや斎藤広志の研究活動を強く意識していた一方で、その理論的な枠組みとまた異質なものを書きたい意図が半田知雄にみられる。これらの要素が相俟って次に取り上げる『移生史』の特徴である「生活の歴史」としての語りに織りなされている。

3　半田が書いた移民総合史の特徴―生活の歴史としての語り―

本稿では半田知雄著の『移民の生活の歴史』の成立について史的考察を試みた。半田知雄論というものが実行しうるのであれば、執筆家としてのその業績の中でいちばん重要とされているその著作と向き合う際、その執筆に対する知識が基礎的な作業であり、その第一歩になると思う。本稿では『移生史』の成立を巡り、人文研という空間の重要性、またはブラジル研究ゼミナールの存在によって代表される『移生史』の執筆される共同研究の背景を見てきた。本稿の最後では、筆者にとって『移生史』の最大の特徴である移民の生活を基軸に捉えた歴史の語りについて触れて、これから残されている課題を上げたい。

まず、ブラジル日本移民を巡る研究で、移民の生活に注目するのは『移生史』だけの特徴ではないことにこだわっておきたい。事実、早い段階から、移民の生活条件や環境などを取り上げ、それについて語る報告書がたくさん確認できる[24]。また、60年代以降実行される文化人類学的な研究（たとえば、泉靖一のグループなど）も、移民が住む住宅、移民が使う農耕器具、移民が食するものまで、多岐にわたって緻密に記録してきた。それでは、筆者が本稿の冒頭から主張し続けている『移生史』の特徴である「生活の歴史」としての語りとはどこにあるのだろうか。その問題を紐解くために、まず『移生史』の構成を見てみよう。

完成された『移生史』は下記の【表３】のような構成を持っているが、1967年執筆開始当初から、半田がその構成を予定していたわけではない。もう一度、1967年の「≪コロニア生活文化史≫について」に戻って、『移生史』を書き出したころの半田知雄の意図をみよう。

私の仕事は、実は、アンドウ氏の理論的な研究と斎藤博士の農業方面における特殊

的研究との中間にあって、移民の生活の変遷を記述して、移民史の肉附けをしようという計画であったが、考えてみれば、これは決してなまやさしい仕事でないことに気がつく。生活文化史などといえば、いかにも専門家の仕事のように思えてきて、かえって仕事がしにくくなる。私にできることは、今までのコロニア史とは、ちょっとばかりちがった、むしろ今まであまり重視されなかった生活のこまごまとした点まで記述することである。（中略）

何と何ということは、移民の生活をかく、という観点からきめるので日伯交流史や外交問題などは、かなり省略していくつもりである。それはまた、一面では私の能力によってもきまることで、一人で人間の生活のすべてにわたってかくことはできない[25]。

【表３】『移民の生活の歴史』の各部の題と分量（初版）

	部（章分けなし）	分量（頁数）
1	第一部：契約移民―金のなる木をさがして	157
2	第二部：初期移民の都会生活	45
3	第三部：独立小農への発展	81
4	第四部：植民地建設途上の諸問題	29
5	第五部：地方史―各植民地の歴史	145
6	第六部：全盛期の植民地（一九三〇－四〇年）	59
7	第七部：移民と風物	39
8	第八部：移民社会の中心地サンパウロ市	13
9	第九部：深まりゆく移民のなやみ	57
10	第十部：戦後の混乱と新しい生活への歩み	81
11	第十一部：コロニア統一への動き	13
12	第十二部：コロニアの現状	43

斎藤広志とアンドウ・ゼンパチの研究の中間にあって、その肉付けをするというのは『移生史』執筆開始の半田の意図であるが、『移生史』を解読する大きな手がかりになるのはその肉付けという表現が秘める意味合いである。半田にならって生理学的なメタファーを使うならば、肉付けという表現は必然的にその肉が被れる骨組みを必要とし、おそらく半田はその意味合いで肉付けという言葉を用いたのだろう。そうであれば、半田が考えている骨組みとは斎藤やアンドウ・ゼンパチなどの研究であり、ブラジル日本移民を巡る研究の蓄積である。既に出来上がっている骨組みに、より細々とした、今まであまり重視されなかった生活を取り上げるのが半田の思案した目標であり、『移生史』が書かれる動機もそこにある。

ただし、半田は移民の生活の描写およびその記録のみをして、斎藤やアンドウのより広範な研究にそれを付け加えようとしただけではない。『移生史』を通して、半田知雄が理解する「生活」の意味を汲み取るなら、彼にとって生活というのは固定化された概念ではないことがわかる。移民の生活は諸条件によって変化し、左右される。その時代や場所、政治情勢などによって流動的である。その変化に富んでいる中に移民が生き、その生活ぶりにこそ移民の真相があることを半田知雄は『移生史』を書くことによって言おうとしたのである。移民の生活から適応、同化、郷愁など、戦前から意識していた問題を照合し再検討することにおいて、『移生史』は生活環境を基にした移民の精神史の試行であると言える。

その意味において理論的な枠組を認めながら、その枠組に色彩を与えようとしたことが『移生史』を書いた動機であるかもしれないが、『移生史』はその骨組みをはみ出て超えてしまったと言える。経済学あるいは社会学的な側面からブラジル日本移民史を追究していた斎藤やアンドウの研究により人間性を加味することに『移生史』の執筆動機が宿っているかもしれないが、笠戸丸から70年代のコロニアを見つめる半田が語るのは衣食住の変化や奥地の移民の恐ろしいカボクロ化だけではない。また新来者とブラジル・ボケの確執、あるいは一世と二世の対立だけでもない。半田が『移生史』を通して語ろうとしたのは、移民の日常生活の各場面にしか生じ得ない、その精神や感情である。

アンドウ・ゼンパチは人文研の専任研究員として実行した研究において、移民という現象を世界的な規模から捉えようとする[26]。移民の流出を生む経済的かつ社会的な条件から始まるアンドウの分析は、明治維新に遡ってブラジル日本移民の根源を求める。その一方、斎藤の研究も移民の同化を社会学の力を活かして捉えようとする。人文研を中心に実行されたこれらの研究が『移生史』が生まれる土壌になったのは否めないことだが、おそらく半田にとって、移民というのはそれらの研究には収まりきらない。そして、移民史を書くために、半田は移民が実現しうる唯一の舞台であるその生活を選択したのである。このように解釈すると、『移生史』のエピローグにある「移民史は、だれか一人かけば、それで事がすんだというようなものではない。移民史研究所というものが永続的に存在して、資料収集やその編纂をつづけることが必要である」[27]という半田の言葉が輝くと思う。

1980年に『移生史』の第一部がはじめてポルトガル語訳される際（野尻アントニオ訳）、斎藤広志がそのまえがきにこう書いている。

> もし半田氏のこの著作が契約移民制度、農場の構成、20世紀初頭のコーヒー経済などのみを取り上げているのなら、それを興味深く読んでくれる読者はかなり限られてくるだろう。がしかし、そうではない。（中略）『移民の生活の歴史』において半田

知雄はサンパウロ州のコーヒー農園に生きる初期日本移民の苦闘を色彩豊かかつ的確に描き、読者を感動させるような描写をする。まるで氏自身の油絵を見ているようだ。

この著作において、半田知雄は画家または評論家として成熟している自分が、自分の青年の頃の経験を落ち着いた分析にかえっていく。『移民の生活の歴史』は日系人にのみでなく、ブラジル国民一般にも重宝されるべき、サンパウロ州またはブラジル近代史の一片を描いている貴重な著作である[28]。

生活が感情を生み出すのと同じように、感情が生活習慣を生み出して、変化させる。半田知雄にとって、生活の変化にこそ、ブラジル日本移民史の真の姿が見える。筆者にとっては、それが『移生史』を貫く半田知雄の持っていたブラジル日本移民に対する歴史観である。その営みを遂行することは決して生易しいことではなかったろうし、半田自身がその限界を認めている。

こう考えてみると、私の雑文も、ごくせまい範囲の、しかも限られた生活面をとりあげてかきつづけたにすぎない。しかも、日本移民の生活のなかのもっとも微妙なもの、集団内のこまかな精神的結合のしかたや、宗教的な動き、その他、外部ブラジル人社会との接触や境遇の変化による心理的なうつりかわりなどについては、確信をもって記述することができなかった。私がこの移民史をかきだしたころ、「いまはまとめるよりも、資料を集めておくことがたいせつだ」という意見があった。たとえば、古い移民たちは、日一日とこの地上から姿を消していく。彼らの経験を、彼らが生きているうちに記録にとどめておくことが、緊急な仕事だ、というのであった[29]。

なお、移民の生活を語る、または移民の生活を調べて書き記すという行為は、必然的にある実証的な問題を抱える。その生活とは一体だれの生活なのか。移民とは一体だれなのか。この二つの問題点は、『移生史』の解読に非常に重要な点である。

結びにかえて

半田知雄は『移生史』を書くにあたって、その当時まで蓄積されたブラジル日本移民を巡る研究をかなり利用した。事実、『移生史』では新しい文献資料（一次史料）はほとんど使われていない（数編の新聞記事に限られている）。『移生史』の歴史的な背景は、主に既出の移民史研究を基礎にしているといっても過言ではなかろう。肉付けをなす、「生活の歴史」としての語りは移民自身から来ていると言えよう。1968年、『研究レポート』第３号において半田知雄が「ブラジルにおける日本移民の生活の歴史―コーヒー農場（ファ

ゼンダ）の生活」を発表する。それは後ほど『移生史』の第１部に織り込まれる、戦前日本移民の生活ぶりを中心的に描いた文章である。その執筆動機について、半田は「苦心惨担（ママ）言語に絶する努力によって今日の地位をかちえた、とのべる歴史にかわって、できるだけ、苦心惨担（ママ）のありさまを記述したいとおもう。それがどこまで徹底するか、書いてみなければわからない」[30]と記している。その「苦心惨憺に絶する」ありさまとは、半田のような戦前日本移民の見聞によって構成されるであろう。それについて半田は次のように語っている。

> コーヒー農場の生活、植民地の建設とそこにかもされていく気風、衣食住の変遷、日本人会、青年会の役割、日本語小学校と二世問題、移住者の思想、たとえば永住か帰国かの考え、二世に対する態度、二世の成長、戦後の心理的変化、新移民と旧移民の問題など、50余年の生活体験と見聞によって、あるものは、かなりこまかいところまで記述できるだろう。いうところの文化問題にもふれたいとおもう。しかし、経済的なこと、特にいろいろな表をあつめ、これを再吟味するような仕事は私の能力から遠ざかる。だからこの方面へは深入りしない。数字などは叙述をたすけるための二次的な役割としてあつかって行きたい[31]。

自己の経験あるいは見聞によって書かれる移民の歴史は、声のない人たちに声を与えたかもしれないが、その生活ぶりが半田知雄の眼を通してのみ書かれているという大きな問題点を孕んでいる。『移生史』は戦前ブラジル日本移民であった半田知雄の書いた著作であるが、半田自身の自伝ではない。ただし、だからといって『移生史』において、移民＝半田の姿が全く見られないというわけでもない。『移生史』に現れる半田知雄はまた二つの側面を持つ。一つ目は自分自身が移民として体験した生活。もう一つは画家、または観察者として日系社会を見つめた人物という側面。また、『移生史』は学術的な文章としてではなく、ある移民の観察や見聞を通して書かれている。半田は『移生史』のその特徴について、「論文ではないから、ただ順序を追って項目的にかいていく。どうしても随筆的にならざるをえない。日本移民の生活という限定されたテーマではあるが、日本移民が見聞したブラジル人の生活もかくだろう。それが、どこでどのように日本移民の生活に影響していくかわからないが、見聞も経験だと思ってかく。小説ではないが、時には≪私≫という主人公が物をいいだしたり詠嘆したりしないともかぎらない。随筆的である以上やむをえないとおもう。今はこんな心境で、下がきのデッサンにはげんでいる。時間があれば、何回でもかきなおしたい」と記している[32]。

移民の生活を中心に日系社会史を顧みる作業は、その生活の隅々に広がる共同的な経験

の共有を可能にする。その意味で、『移生史』の特徴が移民の生活をベースに日系社会の精神史を構築することであれば、我々にとってその精神史の限界や可能性を問う作業が残される。評論家の半田知雄が描く移民像と画家の半田知雄が描く移民像は異なるであろう。また、半田が理解する移民の共同的な経験は、半田が認識するブラジル日本移民像を規定する一つの要素であろう。『移生史』がブラジル日本移民研究の古典であることは誰も否定できないが、その解読は移民史のみでなく、移民の感情の世界を理解する上で大きな手がかりになると思われる。

注

1）『海外移住』589号　国際協力事業団、東京、1999年、22-25頁。

2）MOTOYAMA, Shozo, *Sob O Signo Do Sol Levante - Uma História da Imigração Japonesa no Brasil Volume I (1908-1941)*, Editora Paulus, 2011.　ポルトガル語のみ、題の邦訳は筆者。

3）『移生史』の全文はブラジル日本移民文庫プロジェクトの一環としてネット上で公開されている。http://brasiliminbunko.com.br/Imin.Bunko.2010-SemSon.pdf を参照されたい（2012年9月17日最終閲覧）。なお、インターネットに上がっているのは文章の全文のみで、スケッチや写真などは含まれていない。

4）現時点まで半田知雄の正しい生地は不明。半田の各著作に掲載されている略歴の情報では矛盾する記述が確認できる。例えば、『移生史』の初版（1970年）は「1906年生まれ本籍地栃木県」とのみ記してあるのに対して、その前に刊行された『今なお旅路にあり　ある移民の随想』（1966年）では「1906年栃木宇都宮市に生まれる」とも述べている。2012年8月サンパウロ市にて筆者が実行した聞き取り調査においても残念ながら半田の正しい生地は判明しなかった。なお、本稿では便宜上半田知雄の生地を青森県にした。それは1986年刊行の『ブラジル移民の生活―半田知雄の画文集』の記載に従ったからである。その記載に従った理由は主に、①その著作に含まれている半田の略歴がより詳しいから、②その著作の略歴は半田自身によって書かれたと思われるから、である。なお、半田の本籍地が栃木県鹿沼市であることに関して矛盾はない。

5）本稿の執筆にあたって、田中慎次氏に頂いた資料や調査ノート、また人文研顧問の宮尾進氏による指導が大いに参考になった。感謝の意を表したい。

6）田中慎次「コロニアの良心」『人文研エッセイ』http://www.cenb.org.br/CENB/index.php/articles/display/113（2012年09月18日最終閲覧）。

7）コロニアという呼称とその歴史性は大変に大きなテーマであるが、おそらく前山隆の移民のアイデンティティ変遷に関する研究が古典であろう。それについては、主に、前山（1982）を参照されたい。また、近年では細川周平もその問題を取り上げている。それについては、細川（2008; 10-19）を参照されたい。なお、半田知雄の著作中における「コロニア」という呼称の使用とその意味合いの変遷に関しては別稿で取り上げるつもりだが、本稿ではその問題については割愛して、戦後のブラジル日系社会を指すものとして解釈してもらいたい。

8）中尾熊喜「発刊のことば」、半田知雄（1970）、頁番号記載なし。

9）「ピントール」（pintor）とはポルトガル語で「画家」「絵描き」を表す単語である。鈴木悌一「半田君の喜寿展」『カタログ Exposição de TOMOO HANDA』サンパウロブラジル日本文化協会、1983年（筆者私有の資料）。
10）人文研『研究レポート』第２号、163頁。
11）人文研『研究レポート』第４号、頁番号記載なし。
12）アチバイヤ市の自宅の購入により家にアトリエができ、また、画家としてのみ生計を立てるようになる時期でもある。
13）半田知雄が関係している二つの例を挙げるなら、邦字雑誌『文化』（戦前）と『時代』（戦後）がある。両者の参加メンバーは重複する者が多いが、主に『時代』が人文研の前身である「土曜会」の機関誌として刊行されたことが注目に値しよう。
14）ここではその詳述はしないが、戦前からの地方史の存在は容易に確認でき、戦後にも盛んに書かれる。『移生史』を執筆する際、半田知雄はそれら地方史を大いに参照している。
15）その沿革はここで詳述しないが、同研究所のホームページを参照して頂ければと思う。http://www.cenb.org.br/cenb/index.php/articles/display/27（2012年９月15日最終閲覧）。
16）人文研『研究レポート』第１号、1966年、107頁。
17）人文研、前掲書、107-108頁。
18）中尾熊喜に関しては、前山隆（1981）が古典であろう。
19）蜂谷専一に関しては、斎藤広志編（1983）を参照されたい。
20）人文研『研究レポート』第１号、1966年、111頁。
21）人文研『研究レポート』第２号、1967年、145頁。
22）斎藤広志に関しては、特に森（1991）が詳しい。
23）人文研『研究レポート』第１号、1966年、107頁。
24）『日系移民資料集』南米編（石川友紀監修、日本図書センター、1999年）を参照すれば、そのことが容易に確認できよう。
25）半田知雄、前掲書、145-146頁。傍点は引用者による。
26）主に、アンドウ・ゼンパチ（1966）、つまり人文研の専任研究員として実行された研究成果論文の前半がその前提から書かれる。
27）半田知雄、前掲書、785頁。
28）SAITO, Hiroshi, *“Apresentação”*, in HANDA, Tomoo, *Memórias de um Imigrante Japonês no Brasil* (Antônio Nojiri 訳), T.A. Queiroz, 1980, São Paulo.　日本語訳は引用者による。
29）半田知雄、前掲書、785頁。
30）人文研『研究レポート』第３号、1968年、５頁。
31）半田知雄「コロニア生活文化史について」『研究レポート』第２号、1967年、146頁。
32）半田知雄、前掲書、前掲頁。

◎主要参考文献と資料

＜日本語文献＞

アンドウ・ゼンパチ（1959）『コチア産業組合30年の歩み』コチア産業組合、サンパウロ。
アンドウ・ゼンパチ（1966）「日本移民の社会史的性格」『研究レポート』第１号　サンパウロ人

文科学研究所、サンパウロ。
アンドウ・ゼンパチ（1967）「日本移民の社会史的研究」『研究レポート』第２号　サンパウロ人文科学研究所、サンパウロ。
石川友紀（監修）（1999）『日系移民資料集』南米編　日本図書センター、東京。
河合武夫（1966（初出1949、追記1965））「半田知雄論」『今なお旅路にあり　或る移民の随想』サンパウロ人文科学研究会　太陽堂書店、サンパウロ。
斎藤広志（1947）「同課の諸様相」『時代』第４号、サンパウロ。
斎藤広志（1953）『アマゾン―その風土と日本人』（泉靖一と共著）古今書院、京都。
斎藤広志（1960）『ブラジルの日本人』丸善、東京。
斎藤広志（1976）「ブラジルに於ける日本人の同化について」国際協力機構・JICA『移民研究』12号、東京。
斎藤広志（1977）「ブラジルの日系人―特に社会への適応について―」『ユネスコ』12、福岡。
斎藤広志（1978）『外国人になった日本人』サイマル出版、東京。
斎藤広志（1981）『改訂版　新しいブラジル』サイマル出版、東京。
斎藤広志（1983）『異文化の中の50年』サイマル出版、東京。
斎藤広志（編）（1983）『伝記　蜂谷専一』サンパウロ人文科学研究所、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1966）『研究レポート』第１号、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1967）『研究レポート』第２号、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1968）『研究レポート』第３号、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1969）『研究レポート』第４号、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1970・71）『研究レポート』第５号、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1973）『研究レポート』特集号、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1977）『変貌するブラジル日系社会―中尾熊喜追悼記念論集』、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1978）『研究レポート』第７号、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1980）『研究レポート』第８号、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1985）『研究レポート』第９号、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1996）『ブラジル日本移民・日系社会史年表―半田知雄編著改訂増補版―』、サンパウロ。
サンパウロ人文科学研究所（1997）『ブラジル日系社会における日本語教育―現状と問題』、サンパウロ。
外山脩（2006）『百年の水流』トッパン・プレス、サンパウロ。
中曽根武彦（1999）「地平線の群像―語り継ぐ破天荒人生(9)　半田知雄―日本移民の歴史を書き綴った画家」国際協力事業団『海外移住』第589号。
半田知雄（1966）『今なお旅路にあり　或る移民の随想』太陽堂書店、サンパウロ。
半田知雄（1970）『移民の生活の歴史―ブラジル日系人の歩んだ道―』家の光協会、東京。
半田知雄（1976）『ブラジル日本移民史年表』サンパウロ人文科学研究所、サンパウロ。
半田知雄（1985）『愛はいつまでも』サンパウロ人文科学研究所、サンパウロ。

半田知雄（1986）『ブラジル移民の生活―半田知雄画文集』無明舎出版、秋田市。
細川周平（1995）『サンバの国に演歌は流れる―音楽にみる日系ブラジル移民史』中公新書、東京。
細川周平（2008）『遠きにありてつくるもの―日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』みすず書房、東京。
前山隆（1981）『非相続者の精神史―或る日系ブラジル人の遍歴』御茶の水書房、東京。
前山隆（1982）『移民の日本回帰運動』日本放送出版協会、東京。
前山隆（1996）『ドナ・マルガリーダ・渡辺　移民・老人福祉の五十三年』御茶の水書房、東京。
前山隆（1997）『異邦に「日本」を祀る』御茶の水書房、東京。
前山隆（2001）『異文化接触とアイデンティティ―ブラジル社会と日系人―』御茶の水書房、東京。
前山隆（2010）『文学の心で人類学を生きる―南北アメリカ生活から帰国まで十六年』御茶の水書房、東京。
宮尾進（2008）「日本ブラジル修好100周年記念　ブラジル現代日系作家展―ブラジルの大地に生きる日系美術家たち―」サンパウロ（絵画展カタログ　http://www.brasiliminbunko.com.br/122.Nikkei.Gaka.100Shunen.Catalogue.pdf、2012年９月８日最終閲覧）。
森幸一（1991）「移民と二世―二人の日系社会科学者のライフヒストリー研究序説―」『移住研究』国際協力機構、東京。
森幸一（2010）「ブラジルにおける日本移民研究の回顧と展望」、大阪大学GCOEプログラム、大阪大学（http://gcoe.hus.osaka-u.ac.jp/100710seminar_resume&reference_.pdf、2012年９月８日最終閲覧）。

＜ポルトガル語文献＞
HANDA, Tomoo, *Memórias de Um Imigrante Japonês no Brasil* (trad: Antonio Nojiri), São Paulo, T.A. Queiroz, 1980.
HANDA, Tomoo, *O Imigrante Japonês - História de Sua Vida no Brasil*, São Paulo, T.A. Queiroz, 1987.
MOTOYAMA, Shozo, *Sob O Signo Do Sol Levante - Uma História da Imigração Japonesa no Brasil Volume I (1908-1941)*, Editora Paulus, 2011.
WILLEMS, Emilio e SAITO, Hiroshi, *"Shindo-Renmei: Um problema de Aculturação"*, in *Sociologia*, 9: 2, pp. 132-152, 1947.

（ソアレス モッタ フェリッペ アウグスト　大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）